

# 希望 21

自治 共生 平和

ありふれたこと  
だけ  
ど  
かけ  
が  
え  
の  
な  
い  
希  
望  
が  
こ  
こ  
に  
あ  
る

## 創刊にあたって

今年7月の参院選で、私たちは、ある地域の仲間は「農と緑の連帯」の推薦を受けた候補を立てて選挙戦にのぞみ、またある地域では「平和・市民」の選挙を手伝い、またある地域の仲間は「護憲社会党」の候補を応援しました。

史上最低の投票率、そして、総体として「護憲派の敗北」に結果した選挙といわれながらも、護憲を掲げた政党への投票率は30%にもなっています。いくつもの「護憲派」が乱立(?)してしまった状況に、「なんでそうなるんだろう？」と、素朴な疑問を抱き、判断留保にしたという人、いろんな場所で選挙戦に奔走し様々な思いをもっている人、また無関心を決め込もうとしたけれど、新進党躍進という結果に歯がみしている人が、友人や、ご近所や、同僚にいます。私たちは、そういう仲間たちと出会い、新しい力を創造していきけることに、希望を見だしています。

今、実は氷山の一角であった米兵による沖縄の少女暴行事件を契機に、日米安保がもたらす現状に多くの人々が抗議の声をあげています。しかし政府は、この日米安保を軸にして、ゴラン高原へのPKO派兵を一気に政府決定とし、さらに米軍と自衛隊の物品融通協定をPKO参加時にも可能にしようとする防衛庁方針を発表、河野外相は国連演説で安保常任理事国入りへの意欲を示し、在日米軍駐留費負担増を調印しました。平和を求める人々の憤りをよそに、これまでになく規模と内容をもって、急テンポに改憲状況がつくれつつあります。こうした日本の動きは、日本のみならずアジア・太平洋をはじめとする世界の人々をも巻き込んだ、21世紀の世界の在り様を決定づける歴史的な選択につながるものだと私たちは考えています。それはカネと武力にものを言わせ、弱肉強食の論理で世界を覆おうとするグローバルな力にくみしていくことです。

私たちはこれに対して、別の力(=人びとの力)によって、別の価値(=人間が人間らしく生きら

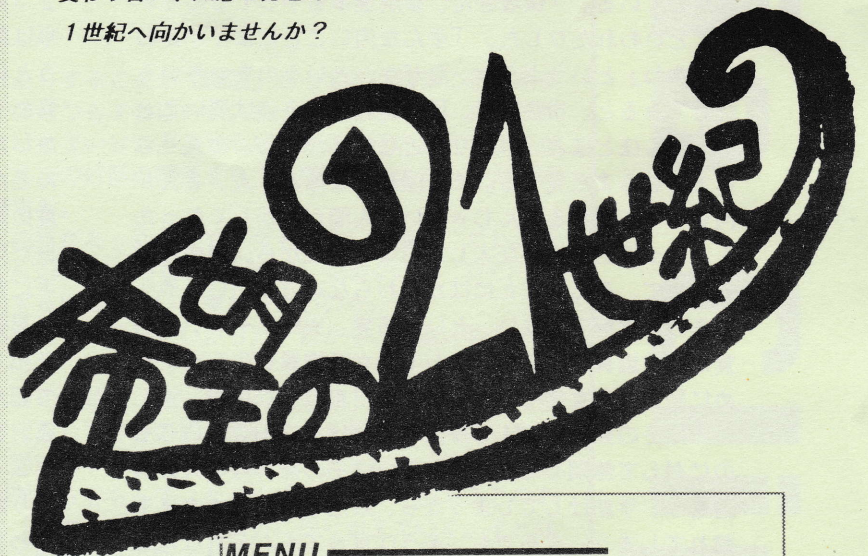
Oct. 1995. 創刊号

1部200YEN  
定期購読1年3,000YEN

東京都日野市旭ヶ丘2-19-8  
美成社マンション501金子方  
TEL 0425-85-5473  
郵便振替：0100-1-97125「希望の21世紀」

れる社会)を実現していこうという、単純にして当たり前のことをめざします。私たち自身が声を出し、動き、私たちの生活や労働の現場から人々の力を一つにしていくこと、本音でものの言い合える関係、信頼関係でつながり、そこに今のようにではない社会のありかたとして民主主義を実践していくこと。そこから生まれる力が、地域のいくつもの課題を自治として実現し、そういう地域の実践とエネルギーが繋がることで、国の政治を規定する力となり、世界の人々が共に生きられる社会へと向かわせていける、と。単純にして当たり前のことなのだけれど、実は難しいといつてあきらめられたり、忘れられたりしてきた「希望」を、新たにたぎいでいきたいと思うのです。

分裂する理由は数限りなくありますが、憲法9条の精神を実現し、力による支配から真の平和を創り出すために、小さな違いを乗り越え、互いに変わり合い、知恵と力をあつめながら、ともに21世紀へ向かいませんか？

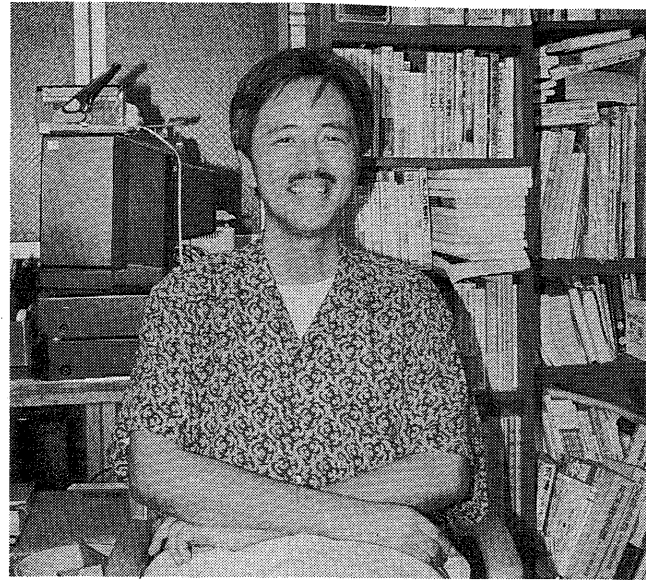


## MENU

- P.1 表紙&メッセージ
- P.2~3 保坂展人インタビュー
- P.4~6 西から東からくぐり歩けば希望に当たる！>  
京都・神戸・三多摩(各地の報告)  
Pick Up 津々浦々~大島
- P.7 Street Media Clip(文化情報)
- P.8 コラム&編集後記

# いま、この人に聞きたい！ 保坂 展人さん

ほさか のぶと：「梟」編集発行人。子どものたまり場づくりなど教育問題に発言しつつ、10代にメッセージを投げかけることを続けてきました。今年の参議院議員選挙では平和・市民共同代表に。折悪しく交通事故にあっけし、選挙のプロセスには実質的には途中から参加した格好になりましたが、選挙後の「市民派」について、選挙総括も踏まえてお話を聞きました。（聞き手：金子光史）



## ◆「普通の感覚」に比べられたか？

平和・市民には、うまくいけばそれを市民政党の土台にしていこうとか、共同代表制度をとるとか、党議決定には従わなくていいとか、地方と中央の関係を上下関係や中央と支部の関係にしないとか、いくつかおもしろい試み、いい発想はあったと思うんです。政治契約をしていく中で、平等な立場でつないでいくんだとか。そういうものがありながら、まだまだ力が足りなかったんじゃないかなという気がしますね。

青島選挙での無党派層の追い風と参院選はなぜ結びつかなかったか、というのを考えると、「地域から」というのはリアリティーがある、姿、形がみえるが、国政となると茫漠としてしまう。地域から、地道な日常活動によってしか変わっていかないんじゃないかという意見がとくに地方議員などには強いですね。ここに平和・市民を含めた参議院選挙の低投票率の謎、原因が隠れている感じがしている。「保坂さん、参院選挙もやってるんですか」といわれたりした。「そんな汚いことによくかわれますね」というような。なぜか、というのをいろいろ話してみると、市会議員、区会議員というのは悪いことやってもほどほど、やはり身近な感じがする、市長くらいまでならまだ見える。でも国政となると1人、2人が何やっても変わるもんじゃなく、人間がおかしくなった人、よっぽど無神経な人しかいないんだから、選挙運動も含めて、そんなことにはかかわらない方がいい、やってるのが理解できない、という感覚。実際、そういう感覚が女性議員の中にも、ましてや女性議員を生み出すために努力した女性たちの中にあっただけじゃないか。

ではその無神経な人しか入っていけない国会というものに対して無関心になり、あるいはその無神経な人の当選を今、手助けしてしまうなら、政治と市民はますます離れてしまう。まあでも、そうは言っても、それは理屈でわかるんだけど、そんな疲れることをようやるわみたいな反応ですよ。それが一般的だったのではないのでしょうか。普通の人の普通の感覚というのは大事ですから、普通の感覚が青島を生んだように、普通の感覚がやはり棄権やレジャーを選ばせたのかなあという気がします。

今回の東京の選挙は、なんか社会党に関係あった人

たちが5陣営で選挙をやったわけです。加えて、かつて社会党に入れて、批判を持ちながら、市民運動をやりながら考えてきた人たちにとって、どこに入れていいのかわからないところがある。その中で選択肢としては共産党も確かにありますよね。多元化してしまったことも敗北の原因だと考えています。

## ◆選挙制度の縛りの中の選択肢

では、参院選後の状況の中でどうしていけばいいのか。これから、加速度的に選挙制度に規定された動きになっていくでしょう。平和・市民どころか、さきげでも、衆議院選挙にいきなりもってかれたら壊滅的になるでしょう。社会新党だといっても何のことかさっぱりわからない。魅力もない。政治的市民運動としては選択肢は2つあるわけです。選挙はやめたと。力がないから、選挙は勝手にやらせといて選挙外のところで政治運動しようという選択が1つあるだろう。しかしそれでは改憲も含めて大事なときに多勢に無勢で押し切られるだけじゃないかという心配もある。僕は選挙や国政に対してちゃんとかんでいきたいと思っている。そうすると、選挙制度に規定されながらの政界再編に、いかに市民派の論理みたいなものをもう1回再構築して行けるかがカギになるのではないかと考えています。

具体的には10月21日に新党さきがけ代表の武村氏を招きました。土井さんと、朝日の石川真澄さんと3人で組んでじっくり語っていただくということを考えている。なぜそういうことをやるのか、という、いろんなニュースが新聞の政治面に出てくるが、何が何だかさっぱりわからない。横路がインタビューに答えても何なのかわからない、社会党の新党の呼びかけは誰に向けてるんだかさっぱりわからないし、新党慎重派もよくわからない。すべて半分腐ったようなニュースが横行して頭がおかしくなっちゃうじゃないか、もっと違う角度からニュースの発信をしたいということなんです。ここで出てくる話自体がそれなりに作用していく、そういうプロデュースをしていくことに意味があるんじゃないか。

シリウス、デモクラッツ、新民主連合、この3つは共通の指向性をもちながら、労組の巨大化した一種の力学に踊らされながら、彼らが何をやりたいのか国民にはさっぱりわからない。いわゆる昔の社会党の左を切ってすっきりして民主党になりたい、もっというと新進党とくっきたいというのが奥底にあるんじゃないか。そういう流れならさっさと一緒になればいいんだけど。

労組はこの間の政治の流れの中で決まっていた役割をしてこなかった。市民とは対局にあるのが巨大労組ではないかと言う気がしますよね。巨大労組支配、それをとったら社会党はなくなるよといいますが、じゃあ何が残るのかと言うと、反戦・平和を願ってきたおじいさんおばあさんの思いというのが。広島・長崎や、あの戦争は2度といやだ、平和がいいという、反戦平和票というのがあった。環境票、水保、公害裁判、原発、そのあたりの票がごっそりあったと思いますよ。巨大な利権集団に支配されたり、宗教団体の名のもとに右往左往するような体質を田さん流に北斜面というなら、南の方に集まってくる人をつないだ選挙協力や、あるいは市民パーティーづくりということを考えていっていいのではないかと。悔しいのは、選挙制度に規定されると2大政党にそういったものを含ませていくことになる。社会党は今、第3極と言っているが、選挙制度上2極しかない。今だと右と右になってしまうんじゃないか。自由民主党と民主自由党という具合に。そうしないためには、その中に、自由市民党とかね、いわゆる戦後保守主義の流れと一線を画した環境や人権を含んだ主張をも包摂する政治勢力を、どういうふうな、既成の永田町の中にも楔を打ち込みながら組み合わせたいのか。これは現実にはかなり難しいとは思いますが、ただ、それを放り投げてしまったら、結局議会外の、デモや集会をやるという以外に政治への回路がなくなってしまう。そういうことをやりながら、たとえばローカルパーティーのようなものがあちこちにできていく。政治だけ、選挙だけを一生懸命やるというのは、あまりいい活動ではないと思う。やはり日常の苦労があってこそ、選挙というお祭りがさわやかに戦えるわけで、それなしに選挙ばっかりやってるといはいい形ではないと思います。

## ◆生き方そのものを重ね合わせるコミュニティ

やっぱり何が市民派だといったときに、全国的な政治課題のプロとしてやってきた人たち、それは意識として市民派であっても、非常に狭い中でどれだけ正しいことを言えるかという人と、いろんな人と会って、いろんな人の輪の中でいくつもの顔を持ちながら、つねにどこまで言葉が届くか意識している人たちとは、一言でいえばバイブレーションが違うだろうと思います。自分が正しくて、悪いのはあいつだということを日本の左翼は繰り返してきたわけだけれども、それを言っている限り出番はないよ、という感じじゃないですか。自分は間違えていた、だめだったということを実心で認めようじゃないかということ。これしかないですね。やっぱりダメだったから国弘さん1人も当選させられなかったわけで、ダ

メだったことを素直に認められるところから総括は出発していいんじゃないかと思えます。

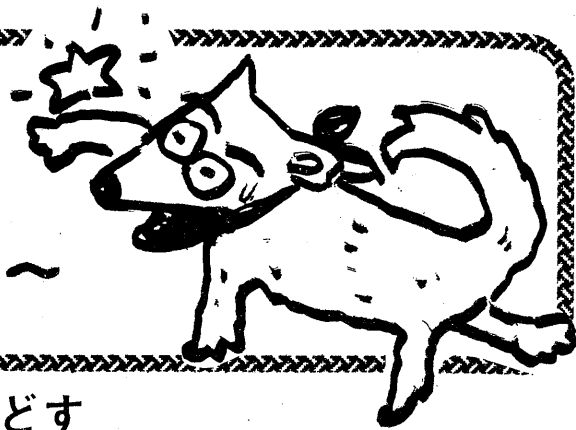
政策的な主張を内側の地域で主張していくんだが、そのグループは、何か建物を建てて、そこにフリースクールを運営している、東洋医学の鍼灸の治療室がある、おじいさんおばあさんとの知恵をくんでいくようなものがある。ネットワークというのは、デモと一緒にやるネットワークなんかだけではなくて、仕事を紹介しあったり、一緒に住まないか、とか、一緒に旅にしようとか、生き方そのものを重ね合わせるような地域スポット、大きな家といつてもいいんだけど、そういうものをどんどん建設していくようなことが必要なんじゃないか。

いわゆる市民運動も、左翼諸集団も、非常に抽象的なものになってしまった。宗教という強力な磁力を教祖に求めるのではなくて、お互いのイメージの広がりを重ねあわせて、その摩擦が生み出す熱気みたいなものを根に持っているような、そういうグループが求められている。

そしてもう1点考えなきゃいけないのは、共産党との関係だと思えます。やっぱり小選挙区制や改憲といったことを考えたときに世界でも珍しく残った共産党をのけては考えられないだろう。唯我独尊状態は変わらないけれども、少しずつ変化はある。もっと柔軟に、人間の解放は、要するに、コミュニティをいかに豊かに人生の中に位置づけていけるかだと思うんですよ。そういう意味ではコミニズムではないかと思うんだけどね、共産主義というよりは協同主義というか。そういうものの新しいラディカルな思想が生まれていこう。それは世界的にいま求められているんじゃないかと思えます。そして、その過程では百家争鳴、間違ったことを平気で言える関係が大事ですよ。■

保坂さんは「生き方共同組合」を政治形成の軸にと訴えました。自転車が集まってこれのような生活に根ざした地域からつくる相互扶助、自助自治組織こそが人々の政治を決定づけるのだという確信がそこにはあります。全国各地で生き方を共同する地域スペースが幾つも生まれ、そこから自分たちの要求を自治に結びつけ、その政策決定の経験や力を積み上げ、全国政治にも影響を持つ力を獲得していく遠大な、そして最も原則的な物語がそこから見えてくるような気がします。教育・医療・福祉分野を柱とした保坂さんの地道な地域スペースの活動と今回の参院選における平和・市民の共同代表としての全国政治コーディネータ的な活動がその確信において結ばれているのだと思えます。残念ながら、今回の参院選の結果は護憲派の分裂という事態の中で様々な教訓を残し、状況はますます厳しいものになっています。そこから市民はいかに新しい政治への回路をつくっていくかについての議論提起であったと思います。次回の国政選挙は小選挙区制の下で闘われることになりませんが、状況が厳しいものであればあるほど、原則的な政治への試みが問われます。私たちの暮らしを切り離す政治から、私たち自身が実現する政治へと、根本的な作り替えが求められている時代です。その果敢な挑戦として、地域から政治をつくっていく試みを、私たちもまた、様々な地域で、様々な仲間とともに、開始したいと思います。金

# 西から東から ～犬も歩けば希望にあたる！～



## 声なき声がアイデンティティーをとりもどす

一'95年参院選を終えて一 希望21・京都 津田光太郎

取るものも取りあえずとは、まさにこのことで、私たちは走りながら考えることにした。

「この参院選、自分が立候補したい。いや、することにした」大濤宗則氏がそう私たちに意思表示したのが、6月10日。とにかく、告示まで実質ひと月もない。世間では選挙はもう終わっていると言う。事務局的な役割を引き受けたメンバーに、経験者といったら候補者本人だけといったら言い過ぎか、恐いもの知らずの「素人」が集まって、選挙母体『民主の風』を旗揚げした。そんな中で始めた選挙戦だったから、ずいぶんといろんなところで迷惑もかけたし、心配もかけた。

仕事の終わった後から夜どうし走りまわってポスターを貼り、宣伝カーに乗るのはマイクを持つのもうまれて初めてだということ「ウグイス嬢」、そんな人こんな人総勢約150人が体を動かしてこの選挙を支えた。その一人ひとりにとって、そして互いに、この選挙がいったい何だったのか、この選挙を通して何を訴えたかったのか、そしてそれはどこまで実現できたのか、何らかの答えを手にしたと実感できるには、もう少し時間がかかりそうだ。

厳しい選挙戦だったにもかかわらず、ほとんど笑い声の絶えることなかった事務所。「とにかく話をしようよ」が最優先。それでも、何の準備もなく、下打ち合わせもなく、いきなりからだを動かすことから始めた私たちにとって、選挙の期間はあまりにも短かった。ここから何か新しいことが始まるとすれば、それはこれからだろう。

どういったらいいのかわからず、ほとんど言葉にならないけれど、日本の社会からたとえば平和への思いの、社会的、政治的な力としての勢力が失われ、いや失って、すでに久しい。「声なき声」とはかつて保守勢力が使った言葉だけれど「声なき声」っていったい何だったんだろうか。政治といえば自分の政策の優劣を競う声ばかりが聞こえてくるけれど、じっと耳を傾ける努力を政治に強制する力を、私たち自身が失っている気がしてならない。耳を傾ける努力抜きに、政治は技術にしかならない。基準のないところに優劣などないことのしらけ。頭のいい圧倒的多数のまじめな日本人は、考えれば考えるほど、日々の生活の中でずっとぼけるか冷笑するしかない。しかもそれが自分にむけられる始末の悪さ。そしてだんだん世の中きな臭くなる。

眉間にしわを寄せて、「ヨーするに、日本には民主主義ってものがまだまだ育ってないんですよ」って憂えて見せて、内心ほくそえんでいる輩がいると思うと、くそ！って思うじゃないか。

自分を自分でわらってしまう頭のよさを、もっともっと本気で捨ててしまえば、世の中ずっと暮らしやすくなるはずだ。ようするに、もっと「不良」になろうぜってことか。

本音の心境をいえば「あきらめない！許さない！」って事かとは、候補者大濤氏本人の弁。たったそれだけで選挙戦に打って出たのも、これはもう「不良」のなせるわざか。

「憲法9条の改悪を許さない」「許さない！あきらめない！庶民の手に政治を！」

——これは私たちが最初に立てた選挙スローガンだが、「なんかガチガチって感じだね」とか何とかいいながら、この大真面目さと不良さは、一人ひとりの内側でけんかしながら最後まで同居してたように思う。最初にいったように、この選挙戦、事務局的な役割を支えた中心メンバーは「素人」ばかり。年も若い。事務局長（もっとも事務局ってものはなかったけれど）は、若者とはちょっと言いがたいが、それでも選挙管理委員会からもらった書類を字引のようにひきひき会議に臨んだ。無い物ねだりをしないことは、最初から決めていた。

選挙戦の結果は、投票結果だけからいえば惨敗。でも、悔しさはあっても、敗北感というんじゃない。

少なくともこれが緒戦だという意識を、この選挙戦を通じて私たちは共有してきたと思う。何にもむけての緒戦か。その目標の形を、私たちは、おぼろげながらローカル・パーティーと呼んできた。ローカルとは、全国政治・地方政治と区別するためのローカル（地方）とはちょっと違う。「声なき声」が、もう一度自分のアイデンティティーをとりもどす場が、どうあっても必要だと思うからだ。

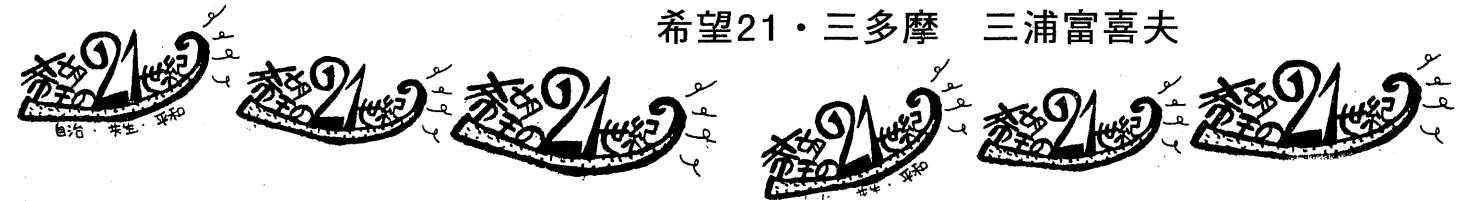
選挙戦を通して、私たちは京都全域を走りまわった。職場・住居プラスアルファの日常生活領域をほんの少し越えただけで、本当はもっと声をかけ話をしたかったこんな多くの人がいることを、改めて実感した。

私たちは、私たちの選挙母体を『民主の風』と名付けた。まだ組織としてのしっかりした実態はない。これがこのままローカル・パーティーとして本当に育っていくのかも、まだ定かではない。何が始まるのか、これが緒戦との思いを共有する参加者一人ひとりのもとに、もう一度投げかけられている。



## 地域を出発点に新しい出会いを求めて

希望21・三多摩 三浦富喜夫



「何か生きづらくなった」という現実、日本に住む私たちよりも南の国々の人々の方が、男よりも女の方が、健常者よりも「障害者」やお年寄り・子供の方が日常の生活の中で、より実感的に感じとっているのではないのでしょうか。たとえば、子供の登校拒否、いじめ、それを苦にした自殺、校内暴力や家庭内暴力などの急増は、子供たちのそうしたシグナルに思えてならないのです。不況の長期化のなかでの女性の就職難は、悪しき性別役割分業構造がいまなお現代社会にはびこっていることを示しています。莫大な債務をかかえた南の国々では、IMF・世界銀行からの構造調整が強制され、大国の意志によって自国の人々の窮乏化がもたらされています。

「人間が人間らしく生きられない」現実が世界大で進行していく一方で、日本では今のような社会ではないもう一つの社会を実現したいと願っている人々の大きな運動が見えてこないのも現実です。冷戦体制崩壊後、資本主義制度に対するもう一つのあり方の可能性・方向性を見失っている今、こうあるべきと言った理想社会を追い求めるあり方では、大きな人々の社会運動を創り出すのは困難なように思えます。人類の歴史の発展がそうであるように、現在の社会の中で人々の生活の前に立ちかかっている障害や困難を克服していこうとする実践と総括、そのプロセスのなかに私たちが望む人間らしい社会を展望していきたいと思えます。そういう思いで地域の運動を見つめかえてみると、三多摩にも外的・内的困難を乗り越え、今のようなもう一つの社会を求める人々の試みが息づいていることに出会い、自分自身の希望にもなります。自分の目に映ったいくつかの特徴を挙げてみます。

一つ目の特徴としては、規模としてはきわめて小さい形ではあれ、各地で国家や企業社会から自立した社会領域を市民自らの手で創り出していこうとしている試みです。無党派や市民派の選挙を担ったグループを中心に、地域社会を比較的トータルにとらえながら、グループ内で自由に語りあい、その中で共通する原則みたいなものを確認しあい、行動し、自らのグループをもう一つの社会領域として拡大していこうとしている動き。また、消費者と生産者が結びつく形態や、障害者福祉や医療の問題を地域というエリアで共生という観点ですすめようという形態であったりという、前者に比較し個別課題からの発展途上にあるところもあります。



二つ目の特徴としては、地方政治への市民参加の流れです。日野市では市民の声に応える形で『市民参加要綱』がつけられました。これは主に、市政の政策決定にあたっての諮問・審議に市民が参加できるように公募の制度を新設したことが特徴で、全国各地の地方自治体や市民運動グループから注目と問い合わせが集中しました。また同市では、93年から今年にかけて、市民が「マスタープラン」づくりに着手し、市民としての街づくりの基本的な考え方・方法をまとめあげました（本年4月に冊子として完成）さらに、国立市での『景観基本条例』や日野市での『環境基本条例』などの直接請求運動も最近の特徴的な運動としてあります。

三つ目として、労働運動や反基地運動の後退に反例する形で、市民・住民運動が各所に息づいているということです。日の出町のゴミ処分場問題（第二ゴミ処分場の建設に対してはトラスト運動も展開されている）や圏央道反対運動などはその代表的なものです。その他にも、都市計画・区画整理などをめぐっての環境保護の住民の声は各地であがっています。

四つ目の特徴は、それぞれの運動のなかで、これまでの物質文明のとらえかえしから本来の人間として価値感に焦点をあてて主体の側の内面的困難を止揚していこうとする動きです。

こうした人々の試みからすると、「政治離れ」という言葉は、地域というエリアで見ると、マスコミの中で踊っているだけのようにもみられます。今の政治に対する「ノー」であり、既成の政党に対する「ノー」と言いかえることもできそうです。しかし、こうした人々の意志が、社会変革の主体としてははっきりと見えてこないのも現実です。かかえるそれぞれの問題が変革の主体である人々の間で政治的にとらえられ、それらが統一した人々の力として機能する方向に向かっていくためにはどうするか？ が問われているのではないのでしょうか。希望21・三多摩は、この難題を何かによつて解決するのではなく、人々の知恵と力によって解決しようという意志から誕生しました。大海に浮かぶ木の葉のような存在ですが、足元・地域を出発点として民主主義の徹底をとおして、自治・共生の社会領域の拡大をめざして活動をつづけます。当面の目標にはローカル・パーティーの形成をかかっています。

紙面をとおしての今回の出会いが、顔のみえる出会いに、全国各地と運動としての出会いに発展していけるように頑張ります。あなたにも一日も早く出会える日を実現するために！

## 被災地神戸の“希望”おこし 希望21・神戸 中北幸司

- ◇ 救援隊が発足しては8か月。物資もライフラインもなにもなかった冬、ボランティアが帰っていった春、5月の豪雨、猛暑、避難所「閉鎖」に揺れる夏の終りと、被災地の苦難は折々にその内容を異にしながらも続いています。天災は一つ、でも人災は数え切れないほど。
- ◇ その人災の発生源としては揺るぎのない地位を占める神戸市は、問題点の指摘を受けても蛙のツラになんとか。あるときは「未曾有」をタテに仮設や避難所での行政による人権の侵害をやむをえないとし、その口で災害救助法にのっつて「法でまっまっていることですから」と避難所から追い出しにかかっても恥じない。その同じ救助法で規定されている家屋の補修費用負担については口をつぐみ、本来足らずを補う筈の民間の義援金でお茶を濁そうとするあつかましさ。年末に刊行予定の「市民が作る神戸市白書」（労働旬報社）は限りなく「黒書」になるんだろうな、と編集会議にでるたびに思う今日この頃です。
- ◇ そんな中で救援隊は今、大学の近辺にある「地域型仮設」（高齢者・身障者用の仮設で風呂・トイレ・台所などが共用）の支援を行っています。「テント村へは車でパトロールしとったけど仮設にはちゃんと詰め所を作って張り付こう！」ということで運動会用のテントを使って詰め所を作ったのは5月のことでした。もちろん公園管理者の許可は出ませんでした。使ってええかを決めるのは、そこに住んでる人や、仮設の人に『いらん』とか『邪魔や』とかいわれたら、テント畳んだらええやん』といて建てたところが、きょうではすっかり高羽仮設になじんでいます。この詰め所を中心とする活動は、巡回や茶話会を行うだけでなく、他のボランティアの橋渡しとなったり、近隣地域の自治会と連携をとったりという風に結構いろんな人と出会う場となっていくつつあります。ここに積極的に参加しているのは地震の後にやってきた新入生たちで地震のことも、地震の前の街のことも、また地域の大人との付き合いも勝手がわからない中で、討論し、試行錯誤して自分なりの街とかかわるといふことの実感をつかんでいっているようです。
- ◇ そして、この高羽仮設にも自治会が結成されました。とはいえ前途は多難。近々山陰から大工さんのボランティアが来て「一日仕事」で大工仕事をしてくれることになったのですが、希望が多かった倉庫や自転車置き場は結局立地のことで折り合わず、各部屋の棚などをつけることになり、大工さんに依頼する仕事としてはややもったいないことになりました。でも、59世帯ほどの仮設のこと。よく話し合えばどこかで折り合いがつかはずです。そしたら実際に建てる方はなんとでもなると、腰を据えてこの自治会の発展を応援していこうと思っています。



## Pick Up 津々浦々 東京大島 島の生活を始めて

以前知り合いが住んでいた沖縄の久米島や西表島に比べると、大島は身近であり、自然や文化の面でも本州と根本的な差異は認められない。しかし、私の目から見るとまだ原生林が多く残っている火山島大島は魅力にあふれているし、社会構造や人間関係が露骨に見えてくることも今のところとても新鮮で面白い。

私の車を運ぶ貨物船が出る豊洲埠頭で非常に強烈な光景に出会った。搬入を待つおびただしい数のプロパンガスのボンベが、果てしなく並んでいた。考えてみると日常的で当たり前なことだが、この光景こそが依存しないと生きていられない大島のあやうい実情を最も表しており、日本そのものの存在をも象徴しているように思われてならない。

もし燃料が入ってこなければ、日本に収奪されたフィリピンのようにいまだ多く残っている鬱蒼とした木々は瞬く間になくなるであろう。野菜をはじめ大半の食料は外から入ってくる。まったく外との交通が遮断されるとどんな生活になるのだろうか。主食はさつま芋、自分で獲った魚を焼いてあしたば入りのお汁が定番となるのだろうか。そしてひょっとしたら本当の豊かさへと向かうきっかけとなるのかもしれない。以前は共同購入で無農薬野菜や無添加の食品を容易に手に入れることができたが、ここでは今のところ難しく、住居の前に播いただいこんの種や植えたきゅうりの苗も雑草の勢いに負けて消えてしまった。学校で出している通信に、私は「大島に、自然と共存していく可能性を感じている」と、来島して早々生意気なことを書いてしまった。少しずつ島の厳しい現状を知ってくると、そのことがいかに絵空事的美丽句なのかも痛感できる。しかし「共存」への道筋をこの島からですらアピールできないのであれば、日本の将来はないと言える。この島から何を提言していけるのか、とりわけ島の中学生たちと共に模索していきたい。

大島在住・教員 尾形勝義



## ASIAN CALLING-オレたちの不戦決議-

14年間にわたって続けられている老舗のロックイベント「JUST A BEAT SHOW」によって呼びかけられた敗戦50年にあたっての一連の行動「ASIAN CALLING」は、去る8月19日の代々木公園でのフリーコンサートから開始された。この行動の呼びかけ人である島掬次郎がヴォーカルをとる THE JUMPS をはじめプライベート、グループ、趙博、フィリピンからデッサ・ケサダなど多彩な出演を得、事前にはほとんどマスメディアが取り上げなかったにもかかわらずオーディエンスも約1000人が集まった。出演アーティストたちの熱の入ったパフォーマンスは心に訴えるものがある。参加した人のどれだけに「反戦」「アジアとの共生」というメッセージが伝わったかは疑問が残る作りであることはいなめないが、回収されたアンケートからは、「平和を守る」という問題意識は当り前のこととして持っているということがわかる。その当り前の問題意識が、今の社会を変革していく力にどう結びついていくのか？ 文化と政治は無関係であるはずがないのに、日本の現状では両者をなるべく無関係なものとして位置付けようとする力が意識的にであれ無意識にであれ働いているような気がする。これまで様々な試みがされてきたが、なかなかしっくりいかないんだ。「ASIAN CALLING」はこの状況に風穴を開けようとする新たな挑戦である。8.19以降も代々木フォレストシティ、麻布YELLOW、下北沢CLUB251などで精力的なライブをおこない、音楽雑誌を中心に徐々にメディアにも取り上げられてきている。10月末に来日するドイツのストリートミュージシャン「クラウド」とも合流を計画している。

冷やかに批判することはたやすい。しかし、冷やかな批判は今まで変革を生んでは来なかったろう。20代30代の若い奴らがこぞって選挙にでも行くことになれば、この国の政治地図はガラッと変わるだろう。そしてまた「ASIAN CALLING」を傍で見ながら期待するだけでもつまらないだろう。一緒に大きなうねりをつくりだしていこう。ステージの熱さを変革の力にするために。

(未来はみんなでつくり隊 菅原"ニギ"和之)



ASIAN CALLING  
中心のバンド  
THE JUMPS

### コラム

### 第一歩を踏み出した！

私たちは、まず第一歩を踏み出した。

他人様のいうことに、いちいち注釈つけたりケチつけたりすることが「議論」だって呼ばれることがあまりにも多すぎる。希望を殺すに刃物はいらん、「議論」の一つもすればいい。もう、うんざりだ。だから私たちは、まず第一歩を踏み出した。えばって言えることじゃないけれど、でも私たちは、そのことをこれからもずっと大切にしていきたい。そうすれば私たちは、本当の対話の関係をもう一度発見しなおし、大切に育むことができるだろう。それが、私たちの共有する確信だ。

「希望」を自分の名前として語ることに、ずいぶん抵抗があった。いや、今もある。希望は、だれの所有物でもないのに。だれの所有物でもないから希望なのに。なんて恐れを知らない仕事なのか。必要なのは、「バンド」の箱を弄んでいるかみえる今の時代と自分たちに対する掛値のない自覚じゃないのか。

それでもあえて希望を名のるのは、その処在を私たちが精一杯示したいからだ。だから、希望は私たちの名前ではない。本当は、私たちの時代の名前だ。

この間の議論の中で、私たちは「希望21」の組織としての性格を「統一戦線の推進隊」という言い方で表現してきた。私自身は、「統一戦線」という軍隊用語で代用して自分の言いたいことを表現するのはいやだという思いがあって、ほんとはちょっとちがうのかなと思いつつも「エキュメニカル」とか、「越境」とか自分勝手に言い換えて使っている。いろんな失敗やら困難やらをもって、とかく「敵」を作り出すことのおくせくするようなむなししい力の使い方を、少しずつでも「味方」を作り出す努力に作りかえていく。それは何か今あるものを寄せ集めてやろうとちゅう思い上がった態度とは対極にある。

本当は、とても簡単なこと。そう言っただけじゃないかもしれないけれど、つまりアクロバットの難しさとは全然違うもので、なぜなら赤ん坊の産声から理路整然とした弁論やちょっといやらしい駆け引きまで、「対話」は人間らしい関係が成立する時、だれの特権でもなくいつもそこにあるじゃないか。でも力にたよる発想が、それを全部殺してきた。私たちは、そんな当り前のことを今さらに、もう一度始めなおそうと志したのだと思う。

「対話」は、きつとなんの力にもならない。誰のものにもならないから、独り占めしようと思えば逃げ、頼ろうと思えば突き放される。でも一番ラディカルで、とつともわかりやすい選択肢だ。

## 反核の力を変革の力に

世界からの抗議の声に耳もかそうとせず、去る10月2日フランスは2回目の核実験を強行しました。これにはとにかく怒りの声をあげて一刻も早く核などというものを廃絶していかなければなりません。しかしながら、世界一の核大国アメリカが明確な態度をとらないのはまったくバカげたことです。そして私たちの暮らす日本の政府も口ではいろいろ言っていますが、プルトニウム発電なんてとんでもないことを平気で開発し続けてる。どういうことなんだ！

ただ希望がもてるのは、今回の核騒動のなかで、普通の市民たちが全世界で本当に怒っていて、実際に行動を開始しているということ。それは、フランス市民もアメリカ市民も日本の市民もね。希望21の仲間の一人も連日フランス大使館前で座りこみに参加しています。そこには毎日のように新しく参加する人がやってくるらしい。この力を結集させて、一握りの権力者たちから大多数の市民の手に世界をとりもどそう！反核の力を変革の力に、核実験を止めることは世界を変えることだ!!

(未来はみんなでつくり隊 菅原ニキ&石井)

### 編集後記

みずみずしいほどではないにしろ、比較的若いメンバーの多い希望21東京地域が編集を担当。各地の原稿を集めるまではまあよかった。タツタ8ページじゃーんと思っていたのですが、青息吐息の編集作業、今日は目の前で終電のドアが閉まってホームを涙でぬらした。私の故郷の電車なら、ゼツタイ止まってバックしてくれさえるのに。マックの愛称で近年とみに普及しているマッキントッシュでつくることになってたんですが、なぜかページメーカーというのと、クラリスワークスというのと、クオークエクスプレスというのとあって、クラリスはクオークではプリントできないとか、プリントしたら句読点が行頭にきてるとか、誰んちのプリンターは字がギザギザとか、エーンということばかり。アメリカのマックなんぞに頼ったのが間違だった！点は字じゃないことも知らないんだバカロー！ニッポン人は一太郎だ！はりこみゃいいんだと、技術のなさを棚に上げて怒ってるわけですが、まだ今の所、人海戦術のはりこみ版下でいくべきと確信している私です。というわけで、ギザギザな字もツルツルの字もあるのです。お読みになる方の目が悪いのでも、印刷屋さんの技術が劣っているのでもありません。今回の大総括大会を開催することによって、2号に向け鮮やかな編集体制と技術の向上が見込まれます。体力を回復し、次回はきつと、もっと早く出すことができると思います。今回は遅くなって本当にごめんなさい。ご意見、たくさんお待ちしています。ウチの近所にこんな人がいる、とか、私の話をききにきて、とか、こんなイベントやってます、とかとか歓迎です。こんなものあげますというのもいいですね。ミニコミつくってこの道何年、という方などがラクができる知恵をおしえてくださるのもうれしいです。一緒につくりたいなんていってくれと、もっと素敵！(石)

1部200円

定期購読をよろしくお願ひいたします

年間購読料 3000円(送料込み)

郵便振替：00100-1-97125

「希望の21世紀」

『希望の21世紀』●創刊号●1995年10月10日●

発行●「希望の21世紀」全国調整委員会 編集●希望21・未来はみんなでつくり隊  
連絡先●希望21・三多摩

東京都日野市旭が丘2-19-18美成社マンション501金子方

TEL0425-85-5473

●希望21・京都

京都府京都市中京区丸太町通柳馬場西入る鍵屋町75東洋ビル3FCOM京都気付

TEL075-212-2455 FAX075-212-2456

●希望21・未来はみんなでつくり隊

東京都杉並区高円寺北3-22-8大一市場208菅原方

TEL03-3310-4553 FAX03-3223-0468

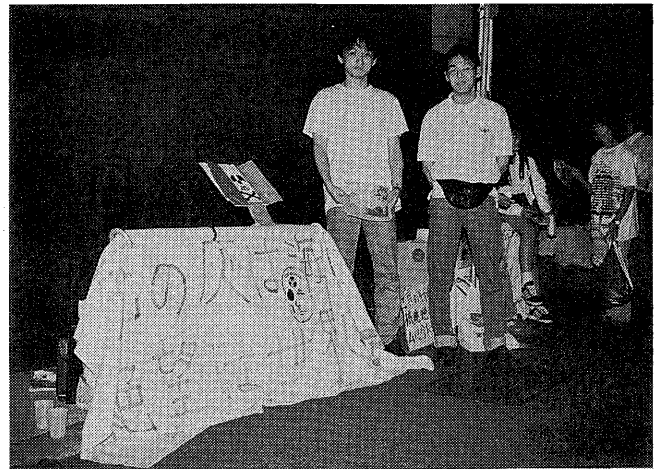
●希望21・神戸

兵庫県神戸市灘区森後町2-1-7斎原ビル302江口方

TEL&FAX078-843-7626

●希望21・大島

東京都大島町元町字小清水273尾形方



▲フランス大使館にて

### 希望の21世紀宣言

私たちは、現在のモノ中心の社会を、人間が人間らしく生きることのできる社会へとつくり変えていくことをめざします。

人間らしい社会一人と人が平等に、ともに助け合って、人間が自然の一部としての本来の姿で生きることのできる社会一を実現することこそが、人々の希望です。私たちはそのために、あらゆる領域で民主主義を徹底し、民主主義の実現をはばむものに対してたたかいます。

私たちは、世界に戦争と大国主義の不平等をもたらす憲法改悪を許しません。9条の理念の実態を日本からつくっていくことによって世界の平和と民主主義の実現に貢献していきます。国と国とが対等平等の関係にあり、人間らしく生きることを豊かさの尺度に、人々の在り方を人々が決め、どの誰もほんとうに武力を必要としない国際社会の実現こそが、平和の実現です。

私たちは地域から国の進路、世界の在り方を決する政治的な力をつくっていきます。そのために、私たちの意思、知恵や力を結集し、互いの経験に学び合い、信頼を築き合いながら、自治の実現をめざします。何かに頼ることなく、広範な人々とともに、変革の力をつくり、その統一を推進することを自らの役割とします。

世界の現実を変えることそれは私たち自身のありかた、運動の在り方を変えることなくしては実現できません。私たちは自らを変え、人と人との関係を変えあうなかで、現実を変革していきます。本音を出し合い、あらゆる困難をともに克服し、成功や喜びを、そして失敗や悲しみをも共有し、助け合ってたたかひの輪を広げ、そのなかに新しい社会を準備していきます。

私たちは人間らしい社会の実現をめざし、世界の平和と民主主義を求める人々とともに、希望の実現に向けて進みます。

希望  
21  
century

